The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Characteristics of communication among Japanese children with autism spectrum disorder : A cluster analysis using the Children’s Communication Checklist-2
Author(s)	田中, 早苗
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61885
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　田中　早苗　）	
論文題名	Characteristics of communication among Japanese children with autism spectrum disorder: A cluster analysis using the Children’s Communication Checklist-2 （　自閉スペクトラム症児のコミュニケーション能力におけるサブタイプ −CCC-2日本語版を用いたクラスター分析による検討−　）

論文内容の要旨

〔　目　的　〕

自閉スペクトラム症児（以下、ASD児）と他の言語障害児との特徴の類似や重複が指摘されるが、境界はあいまいとされている（Bishop et al 2002ほか）。Bishop（1998, 2003）が開発した子どものコミュニケーションチェックリスト第2版（CCC-2）は、コミュニケーション能力を捉える有用な評価ツールであり、ASD児のサブタイプを捉えられる可能性がある。本研究では、ASD児のコミュニケーション能力をCCC-2 日本語版を用いて評価し、年齢別の分析にてサブタイプが認められるか、またそれらはどのようなコミュニケーションプロフィールを示すか調べた。

〔　方法ならびに成績　〕

113名のASD児（平均年齢:8歳3か月,平均FIQ:105.35）の養育者にCCC-2日本語版を実施し、10領域（音声、文法、意味、首尾一貫性、場面に不適切な話し方、定型化された言語、コミュニケーション場面の利用、非言語コミュニケーション、社会的関係、興味関心）の評価点を基にクラスター分析を行った。分析は年齢別に5群それぞれで行い、10領域の評価点、GCC（一般コミュニケーション能力）、SIDC(社会的やりとり能力)について集計し、集約化された群について、各々群間差があるかMann-Whitney U Testを用い検定を行った。

クラスター分析により、各年齢群で主に２つの大きなグループが集約された。学齢群のグループA,Bの10領域の評価点、GCC、SIDC値各々の群間に有意差が認められ（$p<0.01$）、その他の年齢群においても、GCCやその他の領域に差が認められた。学齢群で得られた２つのグループは、主にコミュニケーション能力が低く自閉的な特徴も強いタイプとコミュニケーション能力が比較的高く、自閉的な特徴がマイルドなタイプであった。

〔　総　括　〕

CCC-2日本語版の実施により、就学前から学齢期のASD児には一般コミュニケーション能力（GCC）値で分けられる２つのサブタイプがあることが示された。また学齢期のASDは社会的やりとり能力の面からもサブタイプが特徴づけられ、自閉的な特徴が強いと言語障害が重い傾向にあるという先行知見（Whitehouse et al,2008ほか）と一致する群が認められた。CCC-2日本語版の「言語構造面、言語使用面、自閉症の特徴」の３つの視点からの評価により、ASD児のコミュニケーション能力をサブタイプに分類できることが示唆された。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　　田中　早苗　　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主　査　　教　授	中里　道子
	副　査　　教　授	片山　泰一
	副　査　　教　授	三邉　義雄

論文審査の結果の要旨

自閉スペクトラム症児（以下、ASD児）のコミュニケーションの特徴として、文脈を利用した意味理解や、非言語的コミュニケーションの利用などの言語の語用的側面の障害が共通して挙げられる。一方で文法や音声、語彙といった言語の構造的な側面の障害は同じASD児でも様々であり、知的能力、言語能力において、正常範囲の一群がいることも報告されている。これらのことから、ASD児にはサブタイプがある可能性が指摘されており様々な側面から検討されてきている。しかしながら、言語の構造面、語用面、自閉的特徴の全ての領域の評価を含めた分類を試みたものはまだなく、サブタイプの存在や境界ははっきりしない。

普段の生活の中で使用する言語の語用面を評価する質問紙として開発された子どものコミュニケーションチェックリスト第2版（CCC-2）は、子どものコミュニケーション能力を捉える有用な評価ツールである。この評価には言語の構造面、語用面、自閉的特徴の3領域が含まれることから、ASD児のサブタイプを捉えられる可能性がある。本研究は、ASD児のコミュニケーション能力をCCC-2 日本語版を用いて評価し、サブタイプが認められるか、またそれらはどのようなコミュニケーションプロフィールを示すか調べたものである。

申請者は3歳から12歳の113名の知的遅れの無いASD児の養育者にCCC-2日本語版を実施し、得られた評価点を基にクラスター分析という統計手法を用い分類を試みた。その結果、主に２つの大きなグループが集約され、言語の構造面や語用面の評価点の合計で得られる全般的なコミュニケーション能力に有意差を認めた。年齢、IQには差が無く、これにより、就学前から学齢期の知的障害の無いASD児には全般的なコミュニケーション能力で分けられる２つのサブタイプがあることが示された。近年の自閉症診断はより厳密な手続きをもって行うことが必要とされているが、本研究のデータにはそれ以前の古い診断基準によるものも含まれ、その影響が懸念された。しかしながら必要な手続きを経て診断されたASD児のみに絞って行ったその後の分析においても、同様のサブタイプが得られており、本研究の結果はASD児のサブタイプの特徴を捉えたものと言える。また、学齢期のASD児は社会的やりとり能力の面からもサブタイプが特徴づけられ、主にコミュニケーション能力が低く自閉的な特徴も強いタイプと、コミュニケーション能力が比較的高く自閉的な特徴がマイルドなタイプが認められた。これらのサブタイプは英語圏でのCCC-2を用いた調査では認められておらず、日本語を話すASD児の特徴と考えられる。また就学前においては言語の語用的な側面が比較的高く評価され、学齢期にはこれが低くなる一群がいることが示唆されたことは、年齢的な変化など今後の縦断的研究につながる知見と期待できる。本研究の結果は、質問紙によるおおまかなタイプ分けではあるが、一定数の群から得られた結果であり、ASD児の言語障害と自閉的特徴の関係について示唆するものと考えられ、また臨床的には、質問紙の結果から臨床検査へつなげる際のより詳しい情報提供となる。これらの成果は博士（小児発達学）の学位授与に値する。